

# 看護学生を対象とした看護記録教育の試み ーメタ認知に着目してー

立命館大学大学院応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
柴田 早苗

本研究では、看護学生の「書く力」の育成を目指し、看護記録教育の在り方について検討することを目的とした。研究を展開するにあたり、文章産出に関わる技能を向上させることができるとされるメタ認知に着目した。

予備研究では、看護学生と看護師を対象に、記録を書く際にどのようなメタ認知的知識を持っているのか、自由記述により明らかにした。その結果、31項目が抽出された。

研究1では、記録を書く際にどのようなメタ認知的知識を活用しているのか、予備調査を基に作成した質問紙を用いて、その全体構造について探索的因子分析を行った。対象は看護学生113名と看護師136名であった。その結果、看護学生が持つメタ認知的知識として、「伝達性・読み手の意識」「丁寧さ」「自己の表現」の3因子が見出された。一方、看護師は「伝達性」「読み手の意識・自己の表現」の2因子が見出された。看護学生は、与えられた課題または患者情報などのトピックに対して、“論点を明確に、まとまりのある文章”を産出していく過程で読み手を意識していることが分かった。それに対して看護師は、患者情報などのトピックに対して、“自分の考えや看護観を表現”していく過程で読み手を意識していることが分かった。それらを文章産出過程モデルにあてはめて考えると、看護学生は、知り得た情報を書き連ねていく「知識ー表出方略」、看護師は、情報を吟味し、新たな知識へと変形・統合しながら文章を産出する「知識ー組換え方略」で、読み手を意識していると解釈することができた。つまり看護学生は、産出された文章そのものに対して、読み手を意識することに留まっている状態であり、教育的介入として、「知識ー組換え方略」を用いるなかで、メタ認知的知識である「読み手の意識」を喚起することができれば、産出文章の質を向上させられるのではないかと考察できた。

研究2では、「読み手の意識」を喚起させる課題状況を用いることによって、産出文章の質を向上させることができるか検証することを目的として、10名の看護学生を対象に介入実験を行った。ここでの課題状況とは、教示文による操作のもと、文章産出と推敲を行うことであった。その結果、文章の統括性が向上し、修辭的語句の使用が促されるとともに、読み手にとって説得力のある文章を産出することができ、課題状況による学習効果を認めることができた。

以上より、「書く力」の育成を目指す看護記録教育の方略として、(1)読み手への伝達認識を促す課題状況の工夫、(2)批判的なモニタリングによる推敲を挙げることができた。